

氏 名 高野 哲司

学位(専攻分野) 博士(学術)

学位記番号 総研大甲第 2341 号

学位授与の日付 2022 年 9 月 28 日

学位授与の要件 文化科学研究科 地域文化学専攻
学位規則第6条第1項該当

学位論文題目 近現代の日本の都市における庭の景観と植物利用—東京都
台東区谷中の事例を中心として—

論文審査委員 主 査 檜永 真佐夫
地域文化学専攻 教授
卯田 宗平
比較文化学専攻 准教授
池谷 和信
地域文化学専攻 教授
安室 知
神奈川大学 国際日本学部 教授
進士 五十八
東京農業大学 名誉教授

(様式3)

博士論文の要旨

氏 名 高野 哲司

論文題目 近現代の日本の都市における庭の景観と植物利用
—東京都台東区谷中の事例を中心として—

庭は、自然が人間の欲求をもとにコントロールされた場所であり、人間と自然環境の関係のひとつの原型である。人間と自然が共存する環境を創出することが「にわ」の本質といわれてきた。本論文は、日本の都市の庭を対象として、庭の景観を構成している植物種の同定、植物の入手経路からみた庭の景観の形成過程および庭の植物利用の実態を把握することをとおして都市空間における植物と人とのかかわり方を人間・植物関係学の視点から把握する研究である。ここでは、住宅敷地内において植物が配置され、人と植物との関わり合いが認められる土が有る空間のことを「庭」と呼ぶ。

以下、本論文は6章から構成される。まず第1章では、先行研究、研究目的、研究方法に言及した。これまで、日本の庭の景観とそこでの植物利用に関する研究は農村や漁村を中心としたものが多く蓄積されてきたが、都市の庭の景観を構成する植物種の同定とその植物利用に関する研究はほとんどみられない。また都市を対象にした場合には、邸宅の庭園を中心に庭園の利用、居住者の生活のなかにみえる庭園観といった造園学の視点から行われてきた。本研究は、これらの研究動向をふまえて戦前から現在までの都市の庭の植物種を同定して庭の景観を復元するとともに住民による植物の入手過程やその利用の実態を把握した。筆者は、戦災を受けず過去の庭の景観を比較的今に残す東京都台東区谷中を主な調査地と位置づけ、比較のために兵庫県明石市の調査を行った。まず谷中では、庭の植物種を同定して、それらの利用に関するインタビュー調査を行った。同時に、居住者が過去に庭で撮影した個人のスナップ写真を分析することを通じて、居住者の人生の記憶と植物利用の変遷との関係性を明らかにした。

第2章では、東京都台東区谷中において、戦前における庶民の庭の景観について、一戸建て住宅の庭と長屋の庭の事例をそれぞれ提示した。前者は、ハラン等の常緑性の草本植物、カラスウリ等の庭に自然に芽生えてきた植物、トマト等の野菜類、カキノキ等の果樹類で構成されていた。後者では、ドクダミ等の庭に自然に芽生えてきた植物と木箱に植えられた植物から庭が構成されていた。木箱には、サンショウ等の薬味に用いる植物が中心に植えられていた。木箱には近所の溝で採集した草花が植栽されることもあった。

第3章では、戦後、とりわけ昭和30年代に庶民の庭で撮影された個人のスナップ写真に写る植物種と昭和30年代から残存する植物種を同定し、当時の庭の景観の復元を試みた。本章では、居住者は、ロウバイ等の戦前から庭に残存する植物を管理し、そこにライラック（白花）等の香りを放つ樹木、果樹を導入する動きがある中で、庭に自然に芽生えてきた植物も庭の構成要素として認めていたことを明示した。具体的には、庭に新たに芽生えた植物は、庭から排除されることがなく、子どもの遊びに利用されていた。

第4章では、現在における東京都台東区谷中の庶民の庭の景観の実態について、個々の植物種を同定した上でその用途と入手経路の2つの視点から提示した。庶民の庭は、主に、

居住者が野外から採集した植物、庭に自然に芽生えてきた植物、オモト等の縁起物や儀礼用のものを含む実用的な植物から構成されていた。また、庭を構成する個々の植物の入手経路には、購入、贈与、採集があり、とりわけ採集には3つの形態があることを提示した。それは、谷中地域で植物を採集して庭に植栽する場合、故郷の思い出の1つとして、出身地から植物を採集して庭に植栽する場合、旅行などの際に採集する場合である。筆者は、庭に自然に芽生えてきた植物にも着目し、その利用方法をみることで、庶民が庭をとりまく周囲の自然環境との連続性を大切にしていることを明示した。

第5章では、地方都市である兵庫県明石市の庭の景観と植物利用の実態を次のように把握した。庭の景観は、主に、居住者が野外から採集した植物、庭に自然に芽生えてきた植物、野菜類、ホームセンター等に流通する園芸植物から構成されていた。また、庭を構成する個々の植物の入手経路には、購入、贈与、採集があり、とりわけ採集には2つの形態があることを提示した。それは、居住地域内で植物を採集して庭に植栽する場合、旅行などの際に採集する場合である。筆者は、庭に自然に芽生えてきた植物にも着目し、その利用方法をみることで、庶民が庭をとりまく周囲の自然環境との連続性を重視していることを明示した。

第6章では、まとめと考察を行った。本章では、東京都台東区谷中と地方都市である兵庫県明石市の事例を比較することで、近現代における庶民の庭の景観の変遷とその利用の実態を提示した。具体的には、庶民は庭に食用、薬用、儀礼などに用いる有用植物を植えるだけでなく、観賞目的だけの植物も栽培していた。また、山野から採集した野生植物を庭に移植して庭に新たに芽生えた植物を管理して栽培していた。つまり庭が、野生植物を飼いならす場であることを明示した。さらに、2つの地域の事例から庭の植物を贈与することで社会関係を構築したり、庭が植物の管理をしていた家族の記憶を想起する場となっていたりするなど、庭の社会的機能にも言及した。

以上のように本研究は、庭を構成する個々の植物の種類や利用方法を復元して庭の植物と居住者の人生の記憶との関連性について把握することから庶民はいかに都市の庭という空間に自然を取り込んでいるのかを明らかにした。同時に、居住地域内およびその周辺地域に出かけた際や旅行などの際に野生植物を中心に、野外で植物を採集し、庭に植栽するという「庶民のガーデニング」の実態を提示することができた。なお、本論文では庭の植物に対する庶民の認知・分類の体系は分析できなかった。今後は、本研究で作成した東京都台東区谷中の庭の植物図鑑（138種類を記載）をもとに、彼らの植物に対する在来知の研究を展開していくと同時に現代における野生植物の栽培化や観賞化について考えていきたい。

博士論文審査結果

Name in Full
氏名 高野 哲司

Title
論文題目 近現代の日本の都市における庭の景観と植物利用—東京都台東区谷中の事例を中心として—

本論文の目的は、日本の都市に暮らす一般家庭の庭を対象として、植物による景観の構成の通時的な分析に基づき、身近な緑としての植物とくらしの関わりを明らかにすることである。分析の対象となるデータは、東京都台東区谷中と兵庫県明石市において筆者が実施した計 20 世帯の庭に関する詳細な実地調査と、その居住者に対する聞き取り調査により得られたものである。筆者はまず庭の景観を形作っているすべての植物について、地植えか鉢植えか自生かに分けたうえで、種(学名)、生育する位置、居住者にとっての意味などを詳細に調査し、図化し、目録を作成した。そのうえで、現在まで約 80 年間の庭の植物景観の段階的変化を再構成し、庭の植物と居住者の生活との関わり合いを明らかにした。全 6 章からなる本論文の構成は、以下の通りである。

第 1 章では本論文のテーマ、対象、方法、内容を示す。次に、都市の庭をめぐる生活史をとりあげた先行研究が少ないことを指摘したうえで、学際的な人間・植物関係学の試みとして本論文を位置づける。

続く本論部分(第 2 章～第 5 章)は、内容的に二部構成である。前半部(第 2 章～第 4 章)では、東京下町の谷中における一般住宅にある庭の植物景観の通時的変化を示した。後半部が、兵庫県明石市の事例との比較を念頭に置いた内容である。

前半部(第 2～第 4 章)では、居住者たちによるエミックな時代区分に基づき、第 2 章で戦前、第 3 章で戦後のとりわけ昭和 30 年代、第 4 章で現在の庭の植物景観が、植物の入手経路や居住者たちの生活と記憶に関する聞き取りデータ、および家族写真の分析などと重ね合わせることで、時代ごとに再構成される。後半部(第 5 章)では、兵庫県明石市の住宅の庭について、植物の入手経路に注目した植物景観の詳細があきらかにされる。東京の谷中と明石における庭の景観の比較からは、顕著な相違点として谷中の事例にのみ故郷との情緒的つながりをもとめることが指摘された。そのうえで、①購入、②贈与、③採集(した植物の移し替え)、④自生、の 4 つの入手経路による植物によって構成される庭の景観を検討し、都市住民の庭の「自然」と「文化」の両義性の実態をも例証した。

第 6 章では、第 5 章までの議論を総括し、戦前から現在にいたる約 80 年間の谷中の路地庭の植物景観について、居住者の生活史とのかかわり合いの点からまとめられる。さらに今後の展望として、本論文の成果が、都市への農の内部化をはじめとする都市生活の将来的課題への取り組みに貢献しうることを示唆する。

なお、巻末に、調査結果に基づく「東京都台東区谷中の庭の植物図鑑」と題されたデータベースが付されている。これは谷中における調査で採録された 138 植物種に関するオリジナルな解説付きリストである。

本論文の成果に関して、評価すべき点として以下の5点を述べる。

- 一、高密度市街地の路地庭に生えている植物を正面から取り扱い、都市における人と植物の関係性の実態を解明した先駆的成果として、きわめて資料的価値が高い。
- 二、居住者の思い出や家族写真などを用いることで、これまで情緒的、個別的空間として一般化が難しいとされてきた路地庭の植物をめぐる生活史を描き出した点が画期的である。
- 三、都市の庭の植物景観を分析するにあたって植物を「飼い慣らす」という動物の家畜化の概念的アナロジーを用いることで、都市の庭には居住者がよそから植物を持ち込んで栽培を試みる実験場としての機能があることを明らかにした。
- 四、聞き取りを中心とした民俗学的方法と、植物種の同定や植生環境の記録といった植物学的な知見も併用する人間・植物関係学のアプローチを確立した。これによって、日本やほかの国の諸都市との比較研究の可能性をひらいた。
- 五、「付録」の植物図鑑は、これだけでも都市に生える植物に興味を持つ人すべてにとって実用的な独立した成果である。都市にある人為的空間に持ち込まれた植物相の全体の解明を目指すために、この付録が重要な基本資料となることが予想される。

一方で、それぞれの専門分野の観点からは細部に関する批判的指摘もあった。以下の諸点である。

- 1) 一般的に「庭の景観」ということばに対して造園家は、デザイナーによって作品化された庭園などをイメージする。そのため、下町における自然発生的で手作りの緑イメージの路地庭を対象として取り扱うには、補足的説明が求められる。
- 2) 江戸東京の下町という社会経済条件の下での高密度市街地における研究としてその意義は高く評価できるが、「近現代の日本の都市における」といえる普遍性があるかどうかについては、さらなる検討の余地がある。

そのほか、図表だけで30以上に及ぶため目次のあとに図・表・写真に関する索引が必要、という形式上の提案もなされた。

とはいえこれらの指摘は、本論文がもつ意義と価値を著しく損なうものではない。

以上により、審査委員会は全員一致で学位授与に値すると判断した。